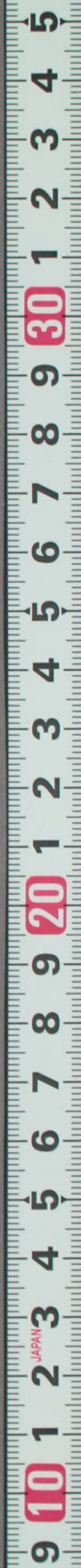


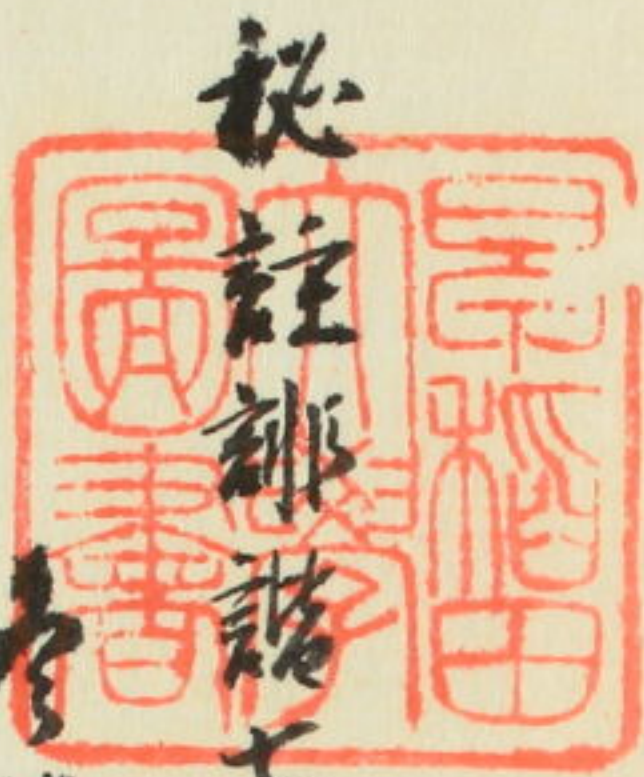


松江御遺七部集卷之一



月二四七廿  
①

五  
月  
廿  
四

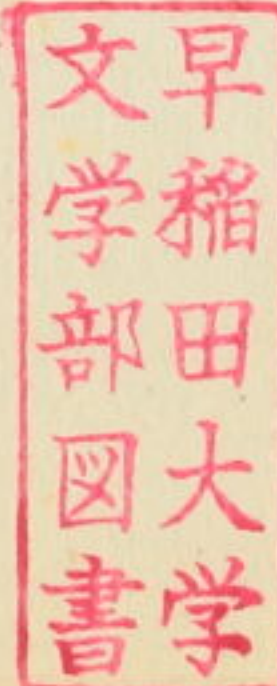


秘註部七部集卷一

是の如きものありては、人の病ありては、  
さういふ病つゝさういふ病人を治すべし、  
むかし、秘註の如きは、玉をとり、  
かゝる

秘註部七部集卷一 秘註部七部集

あるに、その医者も、有る也、  
たり、秘註部七部集、  
竹高ト云、秘註部七部集、  
去ぬ、病も、秘註部七部集、  
は、秘註部七部集、  
果



45-10477

久行師ナリニ借物ニモコウイウ行師ニ似タルヤイヤ  
くニハセニイトキ返ニ聞ヘシ

たそ中とハリ する是の山茶花 野水

誰ヤトハシルト讀ヘシノ字ヲカリタル也誰ソ我ナラニカ  
ソコモアルニイナシテモ山茶花のほろふチリカケルハ何  
ニモセヨ風流の人ナラニ

晨のま水お酒を送下 荷兮

有明のま水ハ京ノ橋然通リ山麓の名水  
アリ是ハ竹之木の狂言アリ山麓ヨリ首領をさる  
虫ニタル也ま水ハ天子ニ水ヲ重ル人也是ハロヨイ水ニ言  
文也

小畑氏ハ何ノ人ナリキヤ

うゝのやみをぬくよ みる

あるハツノ酒屋エ末ル馬也白馬ニテハヨハシ馬強  
キケシキナリ

ね解のむき 花の白い外記 杜園

露ニ毛馬ニ毛トハ階方後ノ階ト言ナリ  
糸スミキノ一穂ハナシ

月のちりま 野ニ 赤と刈 正平

月のちりまハ山の隅ニ入る也花のまびりこ月の入  
相のまびり子を裁合セたる也是を白ト言也

赤鹿ハ 野ニ ちりま ちりま ちりま 野水

赤鹿ハ赤ト名スルハ其アタリノ鹿也又此句ノ鹿ハ隠  
逸也赤ト刈ニ我ラハ耕サスニテ食フヲ思フ身ノ

親老之サレハ荒果タル庵トモイトフ丁更ニナシトナリ

奥より中へ居るを 忍ぶ力の石と 菖

契ハヤスハリノ庵よカクニハシタル人ト見テ業平ナ  
トノ面カケモアリ

俗の法——と 新を志する 権 重五

俗の法——と 新を志する 権 重五  
俗の法——と 新を志する 権 重五  
切シ契ト見テ味タル也カク子近ナシタル身と疑を受  
シヨ無念ニ思ヒ乳ヲシホリ捨タル也

法の新 辛 忍 ば ぬ ます こと くら と 位 荷 子

沙ぬ辛 忍 ば ぬ ます こと くら と 位 荷 子

新やりの 噴きく せきを 禁んで 翁

噴きく 火を 禁んで 養子トト見テカケホヲノ 噴  
きくトハ 念入人ノ 歎ヒナリ

あ——ハ 契 子 だ へ—— 権 重 子 杜 園

主ハ契よハ 苗夕ノ 大キナ 養代ノ 雲 庵——タル  
家ト見テカラ 家トハツケタル也

田中 好る 小 新 け 権 重 子 荷 子

小方ノ 柳 庵 子 氏ハ 苗 向ノ 甘 比 比 三 子 移 ン タル 向 ナリ

秀 子 一 舟 子 人 ハ 子 人 也 子 聖 水

人ハ子ニハカハ柙ニ舟トヨセテ轉シタル也カナシニ有所エ  
ヲカシニヲ作スル也

有<sup>レ</sup>名<sup>ヲ</sup>と横<sup>ニ</sup>泳<sup>グ</sup>月<sup>ノ</sup>御<sup>ノ</sup> 杜<sup>ノ</sup>因

希<sup>ク</sup>を<sup>シ</sup>日月<sup>ニ</sup>止<sup>ル</sup>也<sup>也</sup>舟<sup>ノ</sup>引<sup>ノ</sup>の<sup>ウツム</sup>ヒ<sup>テ</sup>行<sup>ク</sup>ヨ<sup>横</sup>ニ  
ヒ<sup>ト</sup>カ<sup>セ</sup>タル<sup>ナリ</sup>

珠<sup>ト</sup>も<sup>あ</sup>き<sup>く</sup>所<sup>ノ</sup>よ<sup>う</sup>みる

珠<sup>サカシ</sup>キ<sup>ト</sup>ハ<sup>人</sup>ヲ<sup>ツ</sup>シ<sup>ル</sup>フ<sup>也</sup>黄<sup>昏</sup>ヲ<sup>横</sup>ニ<sup>ト</sup>サ<sup>カシ</sup>キ  
ト<sup>ハ</sup>白<sup>ク</sup>セ<sup>タル</sup>ナ<sup>リ</sup>

二<sup>ノ</sup>厄<sup>リ</sup>由<sup>来</sup>の<sup>世</sup>の<sup>楚</sup>き<sup>く</sup> 野<sup>ノ</sup>水

一<sup>ノ</sup>妾<sup>ノ</sup>ヲ<sup>ナリ</sup>天子<sup>ノ</sup>御<sup>産</sup>ナ<sup>リ</sup>御<sup>隠</sup>レ<sup>ナ</sup>サ<sup>レ</sup>テ<sup>妾</sup>厄<sup>ト</sup>

ナ<sup>リ</sup>禁<sup>中</sup>ニ<sup>近</sup>衛<sup>目</sup>ト<sup>言</sup>テ<sup>北</sup>面<sup>ノ</sup>侍<sup>詔</sup>所<sup>也</sup>ニ<sup>ノ</sup>厄<sup>ノ</sup>  
ヲ<sup>ナ</sup>ト<sup>所</sup>ニ<sup>テ</sup>ツ<sup>シ</sup>ル<sup>サ</sup>ニ<sup>ト</sup>見<sup>テ</sup>附<sup>タル</sup>ナ<sup>リ</sup>

蝶<sup>ハ</sup>む<sup>く</sup>く<sup>り</sup>と<sup>ハ</sup>か<sup>り</sup> 鼻<sup>ノ</sup>む<sup>む</sup> 翁

蝶<sup>ハ</sup>む<sup>く</sup>く<sup>と</sup>と<sup>ハ</sup>か<sup>り</sup>ハ<sup>世</sup>の<sup>寝</sup>果<sup>タル</sup>ヲ<sup>カ</sup>ナ<sup>シ</sup>ム<sup>也</sup>

か<sup>り</sup>ノ<sup>鼻</sup>と<sup>翁</sup> 紙<sup>ノ</sup>あ<sup>ら</sup>る 室<sup>ノ</sup>み

希<sup>ク</sup>ニ<sup>ハ</sup>一<sup>言</sup>ト<sup>ミ</sup>テ<sup>ニ</sup>厄<sup>ノ</sup>洞<sup>ノ</sup>思<sup>ウツム</sup>イ<sup>テ</sup>厄<sup>ル</sup>  
妾<sup>ト</sup>見<sup>テ</sup>附<sup>タル</sup>ナ<sup>リ</sup>

今<sup>ハ</sup>ヒ<sup>ク</sup>ノ<sup>夫</sup>汝<sup>と</sup>有<sup>ク</sup> 荷<sup>ノ</sup>号

希<sup>ク</sup>を<sup>歎</sup>ト<sup>シ</sup>タル<sup>ナリ</sup>

盗人乃 泥のの 虫の 吹おれり 翁

前句の虫ハキヲ 泥のの 虫の 吹おれり 翁ト寄テヒ、キヲ 附タル也

志 河 宇 宿 乃 名 之 所 水 杜 園

前句ノ宿乃ハ 宇宿也 宇宿水ハ 近江也 是を 名ノ 對附ト言

又宇宿水ハ 宇宿ニ 寄カイニタシラス 宇宿水 山田ノ 庄宇宿川ヲ 宇宿ニ 寄ト言

望 極 乃 宇 宿 乃 名 之 所 水 杜 園

前句ノ宇宿水ハ 心有テ 望ヨ又キタルハ 是 望水ノ 心ヲコノタルナリ

冬 折 乃 名 之 所 水 杜 園

前句ノ 氣寒ヲ冬折ノ中ニ 冬折ハ 青ト見エタ ルナリヒトナリハ 冬折ハ 言フナリ

志 碎 乃 名 之 所 水 杜 園

前句ノ 冬折ノアル 亦ヲ 墓所ニ 碎トミテ 冬折ノ又サニ シキサニナリ 是ハ 白ナリ

馬 城 乃 名 之 所 水 杜 園

前句ノ 馬ノ甲ヲト見テ 白キ物ヲ 白キ物 掛合セタル 也 乃 意ハ 馬ニテハ 電ノ甲ヲト 燒テ 占ヲ 始シニ 夷島 城ノ甲ヲニテ 占カタヲスルカトヲカシニ ナリ

衣きさうの 海あもとけしる 船

前句ノ鳥城ニ郭云ノ以イカハ沃山トレルモノな  
時分ヲ附タル也

秋多一汁しりしりそは夜也 箱

前句の子規ヲハ吐トミテニホキ秋ノ甘ニヲ体タル也秋水  
一汁ハ多ゆ汁也漏刻ノノナリ

日東乃 夢白く 切り 月城とて 重五

前句ノ一汁モリツクスト言割ヲ夢白ニヒカセタル也水  
一汁ハ日中夢白トハ石川丈山ナドノ面影ト見ル  
べし

中り 中権を とまむ 忍色 抄 荷兮

か句風海ノ目見トミテ陰色深人ヲヨセタルナリ

糸の あと 糸く 糸の 又く 是り 翁

前句ヨ牡丹花宵拍ナド見テ糸ヲ糸テ是海ヲ糸ヲ  
陰色ハ遊若信若ナドモノ故葉モアリ

美り 終の 糸を いくま 杜園

前句糸ノノヲ思ヒ其ニ項クト速懐ヨコメタル也

わり 祈り 明方 の 星 守 び へく 荷兮

前句の星ヲ贊トシテ又明方ノ星ヲ祈レハヨキ  
子ヲ産ト言ヲ附タリ

くハ 妹の 眉ノ 起ふ ゆき 野



前句ヨ姉トミテ妹ノ噂ヲ附タリ

後ひとへ衣湯ふ志を笑の足添く 杜玉

前句ヨ志笑ノ都ノ人トミテ居湯ヨ付タリ辰  
湯ハ月ニ六度サカルヲ居湯ト言後ハ織如ナリ

廊下ハ藤のけけつ〜 やし 重五

前句ノ居湯ニ廊下トカウニ添タル也廊下ノ長キ布ニ  
藤トカケタルナリ

思ハとも仕年いま〜衣成振ハ衣

初雪此〜も袴巻て鳴る 野水

世ハ尾張ノ武士之仕年未衣ヲ振ハストハ世ニカラメラレテ  
イニ夕世ヲ捨難キトイフコ  
向まハ初雪ヲ四十余ノ白髪ト見テ年々世ヲ捨度思  
共今年モ仕年ヲ遁シ難ク又袴着テ歸ルトイフ意也

衣〜も〜 茶の食 杜因

前ニ又見ルトハ早天ニ死テ仕官初ルニ茶ニ枯強テウス  
〜ト暖イルモヨキ年比ニ世ヲ捨兼ル心也依ラ茶ノ  
食トハヨク也食ハ刈禱ヲサス〜也此昭ハ昔添ノ脇也

野菊と争ふ袴の おおき〜 菊

前ヨリ秋ノ袴向ヲトリテ秋ノ袴也老朽シテ日ニ  
増也又春夏ノ袴ニ遊ニテ今テニカカ入秋ノ野菊ニテ

兼て了世を食ふに合たり

鶴のけしきしと申すに  なる

野鳥は鶴の染鶴の鳴声にも引く可同申す申す  
鶴の出まき也又ウツラハ物ノヒキニテ居居す様テ  
啼聲ルモノナリ

唐々月被小鞠被試あるん 言ふ

唐々月神トハ口カ月ノ神ニ飾ノ人モ鞠被ヲ鳴ステ  
アラフト言心也其鶴等ニ行ツル啼ルサヲ染ル也則  
其人其人ヲ附タル也

桃 新成 小形 名 徳の富 正平

貞徳ハ世ニ富タル風流人也カッヲナラス人ハ貞徳工出  
入人トシタル也貞徳ノ立圓トテ桃園梅園芍薬園  
蘆ノ花屋花ノ本ト用イタル也連歌ノ字匠花ノ本也  
則誠祖ニシテ長頭花ト号ス松永久也乃ノ孫也吾吟  
翁ノ師ニシテ細川幽齋門人也

西之村 名 沙耆の田原 名 土烟

貞徳ハ富タル風流人ハ貞徳別流ハノ田原ナルモ其奇  
ヲ爾ニイケケヨリナラント具風流ニ士ニ平ケルヲホリウエ  
ルト言也

真 名 芳 名 結 名 流 名 池 名 水

流の芳奥トヨセ田原ハ其人ノヨスキヲ流之節向自ニル  
時ハ自他ニスル時ハ他之又ナク一之ニカカシテナリ

麻子けして泣きさへ涙をたると男 荷子

前ヨ抱女ニウラレタレ女ヤトミテ多由申志トモ言レサ麻  
更ニトサスハ女ヨリ男ヨサス也

縁坊ものうらみみのり 箱

縁坊の怨ハ元言テ有レテ猶タ人育テ且ニ難シタレ  
縁ナリレサレハ坊シ人コリ今ハ恨ヤト言フ也

口横と福とちきさるのあまき 野水

福ヨチキルハ男ハ福アハニ縁坊トハ成レトミタレコ

明ハ歌ヲそ語ラセん 主心

聖日ハ秋ニ首送ラセんとハ女士ノ討死スル時盛中ニ  
名東を柱入ルト言フアリ秋ハサナリテ歌ニ福ヲ恥

ル下ニ無レナリト赤白ハ心ニテ歌ニ首ヲクリセトハ淋  
タリ

小三子ト云トセひとりうらみ 箱

小三子ハ赤例ツカイ之明日ノ産後抱テ礼をノ付ト  
思ヒ置ル各ニ之ヲ婦人ハ木將ヨ一白ノ鬼トスルニ

月ハおそのまき牡丹 三人 杜因

此礼有間ニ牡丹道人トナラシ月出テハセシモナシ  
月ハ逆ク出ヨ盗人スル間ト思フ牡丹ハ為貴人  
又礼床ノ音アレハナリ

瑞あらしのうらみは破れ髪はな 重子

昔ニ為キ申シモノヲあらしはな之古人ハ秋コノ正ノ意

為ノ形ヲ附タリ杜丹ニシテ場ノウケ聖ノ被レニ遊人  
ノヒキアリ

ニハシ〜とのと地を切町 高き

コトトノニ階ハ寺所トシテ淋ミヲ為ルニ葉ナリ  
地産切町ハタシテ寺所ナラナルヘシ

イニセとヤトアリ  
まろびのせと〜や梅のいふ所く 杜園

初世の世トヤヨナリノイカメレクハ世ノ中ノ親想之今初  
世ノ有モ今ニ石仏トナル有ナルニカクイカメレクヨリスル  
ヤ人ノ有ハカナキフヲ地蔵ニヨセタルナリ

売い〜らのまき〜ら〜の 野々  
売トハ女子ソヲ名也借アノ縁ヲ見テモ我子ノ生立カ思ハ  
ル今歳年立テ縁入以ニヤト名をアノ一葉之

柳名ノ解と〜の園の〜の〜 荷号

福名ニ縁又ニ園ト春葉ヲ持セタル之友ニハ売ヲ縁  
ノ売ト縁タルコ

うんひすあま〜の福〜の 箱

鶯紀ヨト言フハトコヤウ女ノ詞アリ是詞ノ白縁言也

葉はく梢ハ柳の葉〜 葉名

鶯ヲ飼立ル山居ト見テ後念入ニ解シ之

三條〜ん〜の 弁 人 重立

柳ハ葉濃ク名は之依ラ不致ヲ階タリニ後カラコトハ園ニハ  
解ニ葉濃ク名は之依ラ不致ヲ階タリニ後カラコトハ園ニハ  
是レ故也

道はくく天は信の舟も春を去る 翁

道スカウノ附ハ石橋ニ更ニ深ニ信ニ是ト云テ是ヲ對  
階ト云ナリ

森をゆく人のまを七十一 杜因

森をゆくハ藤之ノ其人トミテ附タルニ年々テ物莫ク  
悪シトイフ心ニ其信傳チタル者モトシテ志收テ仕立  
ト云心ナリ

春加クは赤米よ金くらり換ひ重五

其ニ年々ニミテ附タルニ是迄ハ金買ヒテ計リテ思ヒシニ  
森をゆくフトクハ赤米ニモ附テ其ニ金ヲ持帰テ  
其人ノ心ヲヒルカヘシタルニ

ひとりのお傘はトコにゆく 花子

ヒトツノ傘ノトコソリサスハ寺へ金ヲ抽リシ人トミテ

依有アリテモ一ツノ傘ヲカリテ三人ニテ帰ルセニナリ

蓮池り清のよけハ夕回 菅 杜因

蓮池ハ其人ノ帰ルアタリトミテ附タルニ是ハ夕ノ信附  
ト云

宮りもつゝ清ゆくは寸さ 野矢

其地ノアタリニ何人トミテ附タルニ其後ノ幽カ成爲  
指ト云スキコト云

月子たてる夜痛の娘の赤柱 新号

月ニ影ヲ映ト句ニテ唐輪ノ人ハ歌人カ又ハ学者業  
道ノ人ナリ

志やぬきかゝく 陰濡を 依 翁

悠遠ヲ海ハ悠遠祥原ノ母ノ子ヲ思テ眼ヲ泣ツラシ  
タル人ニ古事ニモ史旅ノ出テ返ル間ハ洗濯ヲシテ是  
モノ之史ハ無クモハ悠遠ヲ御母ノ思フテ洗濯ヲシ  
テ待ト言ハナリ

秋輝のこぼるるをりゆくおとよハ 野水

秋輝ノ虚ニ聲少トハ悟道心ヨコメタリをナキモノ  
ニコエコト言亮ハ風ナリ

鳥の真のつらさあつちりまゝ

栗ホツチナリトハ静サト言ニ附ニ句一章ノ詩也

枝より破れしひらき山彦り 翁

山彦ニ破レテ山彦ノ傳又ハ草枕カ

ひらきハ思作の鳥、日作、 杜園

文隆年中小原之夜史院御ヲ十ノ貫藤門院ニ侍玉フ  
局ナリ門院ハ安徳帝ノ母清盛ノ娘山后ニテ小原ノ  
野外ニ出玉ヒシ侍ナリ

三々の刺鵲尾長の鳥軍一 重五

禁中ニテ上巳ニ鵲合アリ是ヨ思ヒテ一鳥ノ作ヲ鵲及  
依タルナリ典侍ノ局カ内侍カト言ハリ鵲尾長ト  
葉タルナリニケハ三日也

志くく<sup>イニチ</sup>ハ<sup>イニチ</sup>むむ秋の指法刈 荷守

白カニハ老人被ノ指法刈ハ三月三日ニウツ刈ノ神事ナ  
キナリ有トイハト今ニ所ヲ不知

杖と髪と僅に十歩

清らかなる月を庭す時鳥 杜園

いふて定風速の夕也十歩十間ノ也十百行間モ余  
定ナシ宜モ又わは曇ト思ハ又晴ル別時雨ノ如シ

氷如くりり) あめの 極 妻 重子

霜夕常起下ニテ能くハカナキモフ寄タリ  
才活ノ路ノ氷月ノ後リヲ 極妻ト見テ人間ノ力ノ  
上ハ常水ヲ流カ如トナリ △溜極多極ニ是身無定  
念ニ不住極電光ト云ニ

幽々のせしを たる 持人の去る 野水

霜夕と早春の水は時りて貫衆ト書テウラヒロト  
ヨムモロくノツラ又クユエ持人ノ立ニギトシテ正月ノ  
表白ヲ持出シタルトニテ 結シタルナリ

北の沙つををり 所の 春 翁

ふるの持人を北の沙つををり 押切の表ト古飲の酒を  
切リタリ

馬 兼 換 り 少 たり 風の 赤 子 子 荷 子

北の沙つををり 馬とニテ出仕スルニ其馬兼換トニテ 赤子ノ  
兼換 赤子ヲ打取シタル 赤子ノ兼換ニ馬兼換  
モノハ竹ニテアミ扇ノ形シタルモ也ソシヲ扇ト見立  
テ附シモノカ

弟の ゆゑに 柳 正平

弟向ノキタナキサニ又凡流ニ成ヌシタルニ馬兼換ノ  
既ニ掃落ノケニキアリ

らくく けよものよむ 娘うはなして 重五

前句ノ情ト言ニ龍ト白ヲ子遊シナリカシツクハ可愛ト  
言意モアリロウタケハイツクシムト也ホナル形子也董陽師  
ノ娘ト見立タレ也鶴丈ニ書

情カシツクノを月ノ情カシツクく〜ぬる 杜因

前句ノ意ニ情ヲ競ル故ニ龍ト言ハ思ケル女ノ斬ハ思凡  
男共情ヲ知ラカケル女思ハ男ノカケル情ヲ知ラ内ニ  
入ル故ニ事アリ

高カシツク新カシツクのすも〜カシツク道次 翁

前句ノ情ヲ競ルニ情ノ〜と云ニ高ト兼ト重ニ  
ヲ競ルコトナリ

帯カシツク素カシツクを〜者〜徳カシツク入カシツク坊カシツク 野水

前句ノ款ヲ信樂ノ坊カ圖トシテ遊也信樂ハ遊也

新カシツク月カシツク友カシツク双カシツクのカシツク旅カシツク森カシツク〜 杜玉

前信樂ノ坊ハ素ハ双ハ打トシテ帯素ノ者ナヒヤ、  
カナル体トシテ新月友ヲ并タレ白ナリ

取カシツクじカシツクのカシツク通カシツク〜 日カシツクとカシツク美カシツクはカシツク〜 折号

前句ノ新月友ヲ帯素ノ体トシテ夏衣ヲ附タレ  
也於テ取じハ新ツムモ、故新月、白ヲ附タリ

君カシツク小カシツク局カシツクのカシツク業カシツク〜 能カシツク取カシツク送カシツク了カシツク存カシツク 抄号

前句對ノ遊之又紅花買人ハ難送了ヲニタレ遊之  
ハ難ハ難ノ也

新カシツク婦カシツクノカシツク王カシツク居カシツク〜 未カシツクあカシツクんカシツクとカシツク〜 寸 意云

前句ノ能送ハ即ノ後人ト見テモ、前ノ人ハ金婦



ナラシカク之ノ事ヲ記述ノ事ハ未ナド傳ヘテトク

蘇子傳傳傳のまに蘇子

前二方一多之會傳ノ事ヨリ又曰コソシタルト見テ  
跡タルヤリ

佛 卷之六 蘇子解 三ノリ

蘇子傳傳傳ノ事ヨリ又曰コソシタルト見テ  
跡タルヤリ

縣 蘇子傳傳傳ノ事ヨリ又曰コソシタルト見テ

五形草の 圖 六 反 杜園

前二方一多之會傳ノ事ヨリ又曰コソシタルト見テ  
跡タルヤリ

蘇子傳傳傳のまに蘇子

註ニ云及具場ナリ

蘇子の 馬ノ 移ノ ころ あり

前二方一多之會傳ノ事ヨリ又曰コソシタルト見テ  
跡タルヤリ

蘇子傳傳傳のまに蘇子

前二方一多之會傳ノ事ヨリ又曰コソシタルト見テ  
跡タルヤリ

蘇子の 雲ノ 移ノ ころ あり

前二方一多之會傳ノ事ヨリ又曰コソシタルト見テ  
跡タルヤリ

蘇子傳傳傳のまに蘇子

た司こい出判と在赤の白也

ゆりそとくく刀賣る 年 五

前句ノ子ヲ捨タルト見テ憐念也白鳥ノ仰之

雲の往呉の國の是好し 記 荷字

前句ノ遊遊ト見テ思ハル一草ハ人之何ぞ狂人之

襟子 高祖の行 神威とく 翁

前句を金堂ノ人トミテ珍妙ト言フヲ白セ又雷ノ  
を所ニ襟巻カレキニ

仇人と樽を推し 飲干ん 重五

前句ヲ仇人ノ想トミテ飲タルニ故ニ飲干トハ飲之

聖智のひとよ 及び 名あり 禅 杜園

前句ヲ世の中ヲスミタル人トミテ禪悟ニテ得タルニ  
悟たヤリ

三日月の東ハくく 鐘のあり 為

ちるノ海ニシヲ居テケニニ日月ト入ルヲ為ス

秋 湖々すくに 翠ううす 聖あり

前句ヲ山寺ト見テ西湖ヲ湖タリ

意ふるも 瓜ゆりし とも 瓜 秋あり 杜園

ニウカラニノをキハ之深アト思フ琴ヲ返シ嗔フトヲモフ沙  
袋ヲ放ツ

ちりもきしと 柳 夜と 隔つる 荷字

此は日遊したる人との件ヲ少テ無定之心ヲ去る事也

影彦の如く終作之記休て 野水

前句ノ寂ニキヲ終ニタル也

柳の如くも秋の市川 重五

前句ヲ詩人トミテ市川ト思フ所ナリ

ふくは花の影彦の影彦入 重五

前句思ヒ重テト意者ハ悲人ヲ記シテ終タル句也

抄の如くもわれもおれ〜 前

二句一之ニ西行ノ如クハ此の如クハ終人ノ意ヲ示シテ終タル句也

花彦の如くも花彦の如くも

花彦の己の書あ〜 重五

前句古事ヲ意ヒテ花彦ノ己書コソ思フカラナリヤ重クモ是ニイリテ可也

人の如くも鏡磨く〜 荷五

前句ノ花彦ニ鏡リキト云々之又書ニ鏡ト對照也

花彦の如くも花彦の如くも 杜玉

前句の如クハ花彦ト句ニヤ是ニ是ヲ記スル言ナリ

概イ代敷ヨシテモ今ニ白濱ノ月無定風連ヤウト  
言フ也

鷺見々 ちあいの 月画ヶ形ヶ 野水

前句ノ世之風連ヲ指シタル人形ノ白キヒキ也

風吹ぬ 林の白瓶よ 酒あき日 ぬ

前句ヲ陶酔ノ其位甚トシテ附タル也 鷺ニ林和指  
ナトハ古キトテ指ノ陶酔ノ附ケヲ附ケリ 陶酔ノ  
キト思フトキクテ著人ヨリ 酒造クニ故事也

蘇 減 益 成 市 一 振 盃 盃

唐士ニテハ終人今ハサテノ花ヲツケテ後ヨリサシ  
ロサスナリ 蘇ハ其花ニシテ秋ヲ持セタル也

加茂川や加茂子代奈 微也ミ 荷ケ

前句加茂トシテ京ノ上加茂ニ胡ニル子代福前アリ  
胡ニル上テ又人ノ上タル胡ヲ持来テ為ハ括ルト言フナ  
胡ニル代福前毎年九月初年ノ日也

岩倉の 草あつ 一の比 重五

前句乃草あつの名前を附ケリ是ヲ對附ト言

思ふより 布搦 罌り 思ひ水也 世も

前句ハカキニ附ケルナリ

うきやハ ともち 瓜 城り 三年 杜因

前句ニ人ノ脚之長シテニ三年カヒキナリ

折らまきしてしゆゆらり 花を花の散れぬ 菊

人ヲ折折テ附タルニク子ルハ然ムナリ

火おらぬは煙あまき 人を忍ん 菊

其をさうニ振ル者取トミテ附ルヤ響ノ聲ニナキ人ヲ  
ミン見カヒニキナリ

門ぢのぬり 空子うりて 柳

赤ウヲ門表ト定メタル也

魚カ 陽氏 月のかく やうり 荷

赤ウノ御子ヲカリテ子ル人トミテ附タル也

音おら くわは乃 鐘 セツキ 杜園

折れし度ハ海トミテ附タル也 下名丹後殿前ニ書  
ノ有ニ此ノキリトクヲキトヒニキ也

冬 氷 酒 を 冬 く 氷 海 柳

赤ウヲ幸トミテ又柳ハ海路ノ名ハ之タニクニキリハ  
ヒニキ也

花 は 花 の 花 の 花 と 花 を 花 を 菊

老人ナトヲ思ハ成りてヨリ人ノ観之花ハ極ニ微  
々ニ衣類ノ如シト也

偏 の 偏 を 偏 を 偏 を 天 香 羽

無言 福所ヲ附タルハ赤ウヲ悟道トミテ又山吹ハ口ナ  
レノ花トイフ一義也

白雲 涓々 ぬるぬる ぬるぬる 荷子

前句ヲ清浄際ノ人トシテ白雲ヲ洗ト附タルニ  
白雲ハ清浄ノ地ニ居ルモノナリ

雲ありーこー 叙を辨る 重五

沙所位ノ叙ヲ明ハ清浄ノ地ヲ撰ニキナリ

八十一年 故らつらる 童 母抱て 野々

老萊子ノ面影ニテ養老ノ人トシテ叙キテ申付ルニ

なふらつら ぬるぬる 七夕乃つは 杜玉

前句を若クシテ附テ若クト附タル也若ク若ク對照也  
七夕ノ妻ハ女七夕ニ七夕ハ天帝ノ娘ナリ

西南 梅の 起のつ ちむ 時 ねん

七月ノ月ハ西南ニ出ルヨリ附ナリ

南の ああ ー ー 木打音 翁

亦夕雲上故雲上ヲ附ル桂ニ南ノ對也

職 あり 賢 あり 女 見 せ う つ る 重五

亦夕の他ハ賢女ト云附ナリ

物 観 あり 衆 あり あ ー ー 日 の 音 荷子

粟ハ夜至ノ名知之賢女ハモノニカニ口ス物観ニ洗テ

も 庭 あり 庭 あり 麦 あり 庭 あり 四月 杜園

也 庭ハ庭ニヨリテナリ

初月也前白月解ノ象トシテ子ハ子修ヤ

朝ト向ス 市カのノ宮 也ス

市カカをトシテ市カノ宮ノ宮ト云フ也

寅レ日ノ具ハ海ノ島ニ死シ 翁

海ノ多現ヲナシト市カノ宮ノ所ヲカケルト

ニテノ遊ヤ

雲カくス 南ノ京ノ地 也ス

唐土ノ郡章漢鄒トシテ遊ニナリ

いク強シ 強シもスぬルの像 也ス

日本ノ奈良ノ地下前白月ニテナラノ地ニ大和太細云々長

ノ像云々

泥リ乃乃情交行ノ招 也ス

主場ノ像ナリ

粥嚙る味もあふりと角 也ス

前白月ヲ七穂ノ芥トシテ遊タル也

物有の下り禮々春風 翁

年中連分トシテ其場ヲ遊タリ

北ノ方注々原押サりて

初陣ノ別トシテカウニ修之教登ノ面氣

掃きぬ夢を素らむる夏 杜因

おろしのかたち叫びも淋也

田家明望

君月や海のちりくゝ並の舟て 荷子

冬ノ日ハ秋仙ノ流クナレハハハ一白也嗚のまねヲミセタ  
リ。君月ノ枯ミナルサニヤノ字ニ歎息シテ君  
ノ白ニトヲキ後ニ田ハ氷テ鶴ノ鳥ノ此輩入ルルモ  
ナクイキト首テノ座テモキ凡情也但君  
月ノ霜ノ字ニ鶴ノ白キヲ掛合ノ姿ト言

冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬

翁曰冬臘ハ出来タリト云フト自慢セラシ也門人  
問曰冬ハ天晴カト翁曰サニ非ス此冬ハ冬ハ冬  
モ千里モ見後シタル也依テ何ヲ多クテモ冬ハハハ  
ニレテ詮ナシ史ヲ場所ヲハツシテ上カウ打ヲヒタル  
愛風ノ隙ナリト宜ヘリ冬来一生臘ノノ鑑トナシ  
タリ但此臘ニカウニト言

横 横 横 横 横 横 横 横 横 横 横 横 横 横 横 横 横 横 横 横

前クヲ二句一トニテ短目ノ赤ト云ヒミエルサニヲ  
極シノ庭ニ梅シタリ俣ノ字ニテ庭ノサニニハタリ此  
第ニ後附ニ可尺蕉門ノ傳也

冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬 冬

寒ノ山家ニミナシテ寂ニキ次女ヲ言リ此ツハホ



トアルツト言北條ヨリ武田エ極ヲ留タルヲ思フ  
ヘシ

春も形なき具足二月の節くいと 羽衣

兵糧ノ端トミテシタリ但極ノコホルヲ月ノウス  
くトハヒキ也者モナキ具足トハ對陣ノ技極々  
ル具足ニシテ靜カハ舞也亦ウヨリノウヲ可見

秋より 春 茶 春より 出 水

ウハ袋ニ右平ノ新葉ヲト<sup>チ</sup>入宴ニシテ推與ヲ  
添タリコトヲ極者ノ働ト言但極トハ極葉丸  
ナドノ面影トモアヘシ

林の氏族の清き水はいとくに 飯

亦ウヲ上童ト換骨シテ冷泉為相仰ナド極舎工

トリ玉ノ面影モ可足但換骨スレハ亦極ヲ不論ト言  
ト葉門ノ一例ナリ亦ウノ葉ハ即葉ノ影ナト、  
此ルヘシ

漸く 晴 之 あり ち 新 字

ニウカウニ也ヲ極彼ヲ極河ノ清見ちトシタレ之但  
イトカリニト言詞ニヒキテ漸く晴テトハ言リ

寂として 枝のむの なる 春

寺ノ庄ノ極ヲ云リ

茶 春より 春 茶 春より 出 水

此後ノ産極トミテカセ亦ナド極ウカレシ言カケ  
タリ但枝の本エカケワメシタレ葉休モ余情可有  
ニウノ間ニ靜ナルウヲ可見

新子遊り鳥帽子の如し十 世々

市々、羨ハシキ割有ヨリコ、ニ一物ヲ托シテ御大家  
下屋鋪ニテ殿ノ就ヲ句依シタリ、是持鳥帽子ノ  
細ニヒ、キタリ

一庭り由常作の如の落衣 羽笠

サレハコソ度ト言詞ニ句カラミタリ、本曾依ルトハ大  
家ノ一庭、五十三驛ナト有カ知シ落衣トハカリシ  
事ノ極ヒ也

夏涼きあ山裾りゆらくらむ 荷笠

實ノ由常ノ伴ヲ云リ、本曾ト言ニ深キヲヒカセ、衣ニ裾ノ  
極白ハ羨ハシキ極ナリ、山裾ハ八雲巾敷ニ牡丹ナリトアリ

麻 一とよあおの集あむ 糸

櫛と言著ヲ集フ心ヲ起テ山家、住ル隱者ノスサシヲ  
附タリ、麻刈ト言集ハ句依ナカウ、裾麻ト言モノ  
アレハヒ、ヒキニハシタリ

江と近く船乗居と世以捨て 重五

江原ニ可見ニ句カラミ也、麻刈ト言集ノ一依是故、物  
集居ト一依シテ甚人ヲ定タリ

春月出よ 柳ハおろりあり 杜玉

二月カラミ之物ヲシム庵ト言ヨリ、我心ヲ承依ナルヲ  
ワカ月ト言リ

落衣 留りて後世をうら拂 羽笠

前句和句ヲ受名人ヤト、ミテ公卿ノ家ノ伴ヲ附タリ

但唯ト言ニ後智ノ旨ナリ

常 雲のやうな木尻の山間 聖水

洛陽ニテた迂ノ人トニナシタリケイゴノ情ニテ罪人ヲ興ヨリ出シタル面影也

貴冑ノ足テ聖水浴クニナリクニ ぬ

山間の木尻ノ場ヲ善法トニシテ罪人ノ身ノ行末モカク有ニト悲ナルサナリ

乞 食の善法もくもく 木のめ 荷子

お色シタル人トハナレル果トシテ乞食ニ違儀ヲモヤフニ雲ニ後ニタル体ヲ言リニ句ロラニノ所ニ

派の上り尾を月影に捨の境 杜因

前句ヲ放トシタル人トニナシテ善ハ親ヲ包ム用之但拾ヒ得テ救ス心ナラシ

沙平りすむ水のしらすり 重玉

親ハ龍ニ尊シキ魚ナルヨリ沙平ノ極白ヲ立テ海ニハ早ニ平ノ池川トニテ夏暑ニ多ク好セ玉ヲ飲之但高上ノ句ニナシタル偏ナリ

しらすの年の水色の起もろし 野鳥

コトニ思フと前句ノカラニタル初也降ラヌ年ノ水ノ之ニキ体ヲ言リ

萱草の白りとり 岸を梅の白 柳は

大柳ノ場末トニナシ小柳更ニ萱草ハ後也但夕トシノ冬草

ナカウ夏仕入ノ夕トニテ一勾ノ仕立備アリ照ト言詞ニ  
テ榮ナリ

け——尾の少坊更りよ新羅てし 新号

前句の地ナトトニテ子供ノ持ッ仲之ケレ尾トハケシ坊  
之の女子也

お——ききの実人たろききの実 翁

子供ノきを移きて教ッ仲ナカウ時方ハロキトモ言  
振子共言也但少角豆ニ連ニ勾ニテハ今一勾進ケレトモ  
水陸ノ差別ニ可有

静——飯屋取く月の糸 重五

静ノ意地トニテ田アラシメルサニテ時を介アルヨリ飯屋  
ノ取向ヲエテ月ノソカセル寂美ノ勾飯妙之

お——狐 風やくる——子 杜園

山幸トニテニテニ勾カラニニ附タリ月ニ露ハ枝ナリ

お——根 杉 庭 羽皇

前句山幸侍ニヨリ刺標ノ取向ヲエテ金枝ニハ根ノ  
空流ヲエテ但根ノ字ニ釣ト言字ヲカラニニヒ、  
キナリ

お——鹿 遠りよ母の 妻り入 野水

行底ト言ヨリ妻鹿ノ体ヲ妻ニテ鹿鹿ハ根ノ粉ノ白  
キニ形容シタリ但妻鹿ニハ小糸ヲ續ト言字ヲ  
書テカリモカリト讀ニ行底ノ口ヲフキ也

え——の 州の 夜も 破ぬ—— 翁

妻ニ入ト言ヨリ母ニ孝有シ深州ノえぬヲ附タリ但  
破ぬハ——ト言詞ハ首父母ノ妻ニ居ルニニ年ト

有ハナリ

伏見本懐の滝 花瓜うり川 不存

玄波ノ住一深竹ハ今ノ伏見之本懐モ之降キタル所ニ  
降キハ彼ハ波ニ破レテ花ヲホト意ノ新降ナリ  
但入相ノ表ミヨ言也

いらぬき男猫一ツと控ク秘ケ 杜因

伏見本懐ノ氏家ノ御猫ト降タリ赤白タ著ノ相カナ  
シキ侍有ヨリ御名タルモノナレハ言カ捨タル言心ニ  
但多深キト言詞ハ所通イニ深竹ノ女将ノヒキ  
ナリ

春の去るをの君掃一とよ 重五

掃一とよ其人ト降タリ

水干を身白の聲ワケヤウに 野鳥

白スノ君掃ト言ヨリニ揚ト定ナリ但身白ノ  
聖トハ翁ヲサシテ言

山茶花子ほく 望みのころし 烟笠

カレハ夜ニ翁の巻柘ノ身ニ脇ノ山茶花ヲ一ウト、  
人ノ立歌仙ノ如揚ウトナシタリ但水干ヲ着タル  
人ハ笠ヲ着ニシキナカウコトヲ侍ニ白揚ウハ翁ニ  
附サレトモ其揚ノ時宜ニ可察トハ此事ナリ尚  
冬更ニテ揚ウヲシタレモ立歌仙ノ曲節記リニ言フ  
ヘカラス

秘注源氏七部集卷之一  
三月十日終

前書之金部字之誤字并勘定上  
合金部字之誤字并勘定上

